



京都府京田辺市

興戸遺跡第16次発掘調査報告書

—田辺中学校新管理棟建設に伴う発掘調査—

2011

京田辺市教育委員会

京都府京田辺市

興戸遺跡第16次発掘調査報告書

—田辺中学校新管理棟建設に伴う発掘調査—

2011

京田辺市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、京都府京田辺市興戸北鉢立21番地における市立田辺中学校新管理棟建設事業に伴う興戸遺跡第16次調査の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は平成23年3月5日に開始し、3月20日に終了した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。
調査主体……京田辺市教育委員会
調査指導機関……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会
調査担当者……京田辺市教育委員会 教育部 社会教育課 鷹野一太郎
調査技術員……株式会社イビソク 文化財調査課 持田透
調査作業委託……株式会社イビソク 関西支店
- 4 調査を実施するにあたり、田辺中学校・京田辺市建設部開発指導課にはご協力を賜った。
- 5 本書を作成するにあたり、森島康雄氏（京都府立山城資料館）からご教示を得た。記して感謝します。
- 6 本書で掲載している座標は、日本測地系である。
- 7 本書で掲載した遺構、遺物の写真は、持田が撮影した。
- 8 出土遺物及び図面・写真是京田辺市教育委員会で保管している。
- 9 本書の執筆は、1を鷹野が、それ以外を持田が行なった。本書の編集は鷹野の指導の下、持田が行なった。

目 次

| | |
|----------|----|
| 1.はじめに | 1 |
| 2.位置と環境 | 2 |
| 3.調査経過 | 5 |
| 4.調査の成果 | 7 |
| (1) 基本層序 | 7 |
| (2) 遺構 | 11 |
| (3) 遺物 | 15 |
| 5.まとめ | 18 |

挿図目次

| | |
|------------------------|----|
| 第1図 調査位置図 | 1 |
| 第2図 主要遺跡図 | 3 |
| 第3図 周辺地形図 | 4 |
| 第4図 東側調査区調査前風景（東から） | 5 |
| 第5図 東側調査区調査風景（南西から） | 5 |
| 第6図 東側調査区埋戻し作業風景（北西から） | 5 |
| 第7図 西側調査区調査風景（東から） | 5 |
| 第8図 調査区位置図 | 6 |
| 第9図 東側調査区北壁（2グリッド） | 7 |
| 第10図 調査区北壁断面図（東側調査区） | 8 |
| 第11図 調査区北壁断面図（西側調査区） | 9 |
| 第12図 調査区北壁断面図（東側抜取調査区） | 9 |
| 第13図 調査区西壁断面図（東側抜取調査区） | 9 |
| 第14図 調査区全体図 | 10 |
| 第15図 SD1（南から） | 11 |
| 第16図 SD2（南から） | 11 |
| 第17図 SD3（南から） | 12 |
| 第18図 SD5（南から） | 12 |
| 第19図 SD6（南から） | 12 |
| 第20図 SD7（南から） | 12 |
| 第21図 東側調査区遠景（北西から） | 13 |
| 第22図 東側調査区近景（北西から） | 13 |
| 第23図 東側調査区全景（東から） | 14 |
| 第24図 西側調査区全景（西から） | 14 |
| 第25図 遺物実測図1 | 15 |
| 第26図 遺構出土遺物 | 15 |
| 第27図 遺物実測図2 | 16 |
| 第28図 遺物実測図3 | 16 |
| 第29図 包含層出土遺物 | 17 |

1. はじめに

興戸遺跡は京都府京田辺市田辺から興戸にかけて位置する南北約900m、東西約500mに及ぶ規模をもつ遺跡である。過去15回の調査では、縄紋時代晩期から中世にかけての各時期の遺構・遺物がみつかり、京田辺市の古代を知る上で貴重な資料を提供している。

京田辺市では、市立田辺中学校の新管理棟建設などの整備事業を実施することとした。教育委員会では当該地は興戸遺跡の範囲に含まれており、周辺ことに府道の東側で頗著な遺構・遺物がみつかっていることから、事前の発掘調査が必要と判断し、市内部での協議を行った。その結果、工事日程に影響を与えることのないよう22年度中に可能な調査を行い、調査結果により、さらに拡張して調査を行うこととなった。

現地調査は平成23年3月5日から開始し、中世の耕作に関係したと考えられる溝などがみつかったが、他には頗著な遺構等ではなく3月20日に終了した。

なお田辺中学校をはじめ、関係者の方々、調査に従事された作業員諸氏など多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査位置図 (S=1:20,000)

2. 位置と環境

地理的環境

京田辺市は京都府南部、南山城地域にある。南山城平野の中心を流れる木津川の左岸に位置し、市域西側に広がる京阪奈丘陵から木津川にかけて扇状地や開析谷の地形である。京阪奈丘陵は、礫・砂・シルト・粘土層から成る大阪層群で構成されており、丘陵部は起伏の激しい地形となっているが、近年は開発が進み、大きく景観が変化してきている。興戸遺跡を横断する国道307号線の新設工事では盛土によって顕著な谷地形がみられなくなっている。

歴史的環境

興戸遺跡（1）周辺の歴史的環境をみると、古くは三山木遺跡（45）から縄文時代晩期の土器が出土している。弥生時代前期の遺跡は、三山木遺跡、宮ノ下遺跡（47）、宮ノ口遺跡（12）があげられ、特に三山木遺跡では碧玉製管玉生産が行われていたことが確認されている。次に弥生時代中期の集落があげられ、興戸遺跡西の丘陵に立地した中世の田辺城跡（25）から縦穴住居跡や方形周溝墓が確認されている。これは、弥生時代後期の田辺天神山遺跡（23）や飯岡遺跡（33）の集落と同様に高地性集落と考えられる。

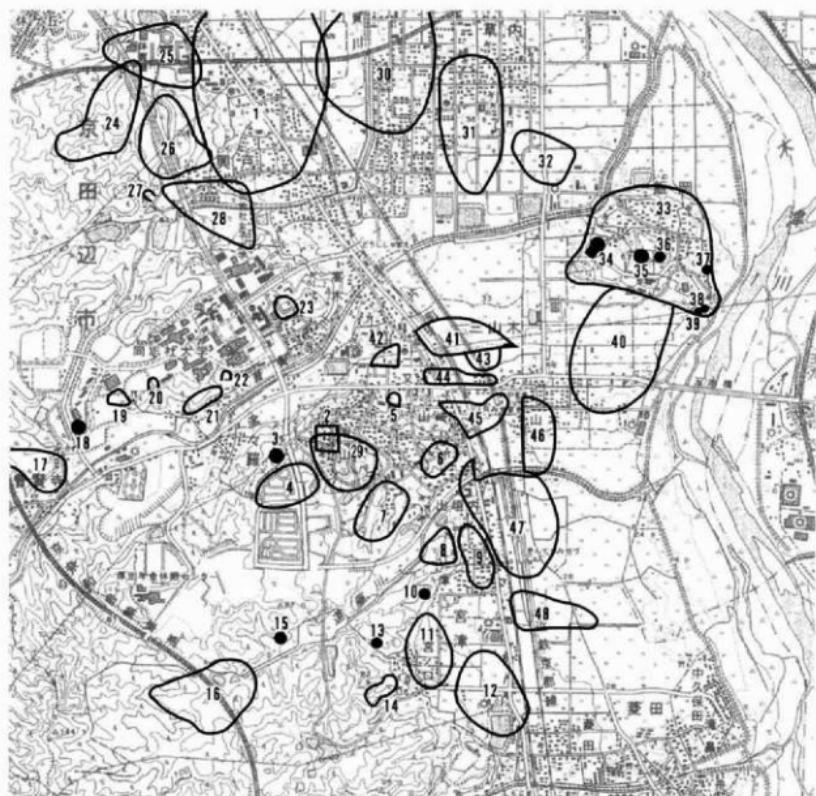
古墳時代に入ると、興戸遺跡西側丘陵に興戸古墳群（26）が築かれる。興戸1号墳は前方後円墳で全長24mを測る。その他、興戸2号墳などの円墳も築かれるようになる。この2号墳は埴輪を伴い、主体部は粘土層に覆われた割竹形木棺で、副葬品では内行花紋鏡や管玉、鏡形石、車輪石、石鉗、鉄劍などが出土している。

興戸遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡である。丘陵頂部に興戸古墳群が立地する山の丘陵裾から平野部に至り、興戸廐寺跡を含み、綾喜郡衙の存在も推定されている。遺跡範囲の中心には平城京と大宰府を結んだ古代山陽道が縱走しており、現在の主要地方道八幡木津線（府道22号線）は古代山陽道の位置をほぼそのままに残している。興戸廐寺を含む興戸遺跡は、古代山城南部の主要拠点の一つとして考えられるであろう。

興戸遺跡は過去に15次にわたる調査が行われており、さまざまな成果が得られている。時代は縄文時代や弥生時代も含まれるが、特筆すべきは奈良時代と平安時代である。奈良時代に整備されたと考えられる古代山陽道に沿った区画が強く意識された建物跡が確認されている（6・8・10・11・13・14次調査）。出土した遺物は、墨書き土器や二彩陶器、土馬、斎串などがあり、官衙的要素が強いことが指摘されている。興戸廐寺は飛鳥時代末期に創建された古代寺院で、遺構こそ確認されていないが、推定地周辺で軒瓦が採集されている。京田辺市内の古代寺院には、三山木廐寺（8）や普賢寺（17）があり、古代の興戸遺跡は古代山陽道の主要地点のひとつと考えられる。なお、『続日本紀』に記載のある、山陽道に設けられた山本駅は、現在の三山木駅周辺に候補地が推測されている。平安時代では建物の方向がややずれるが、縦的に集落が展開している。なかでも縦板組みの井戸枠に直径1mの巨木を割り抜いた水溜を設けた井戸施設が確認されている（10次調査）。遺物も綠釉陶器や灰釉陶器などが多く、一般集落の様相とは異なっている。また、12次調査では遺構は伴わなかったが、双鳥文瑞花五花鏡と白磁が出土しており、平安時代後期の木棺墓が存在していた可能性が高い。

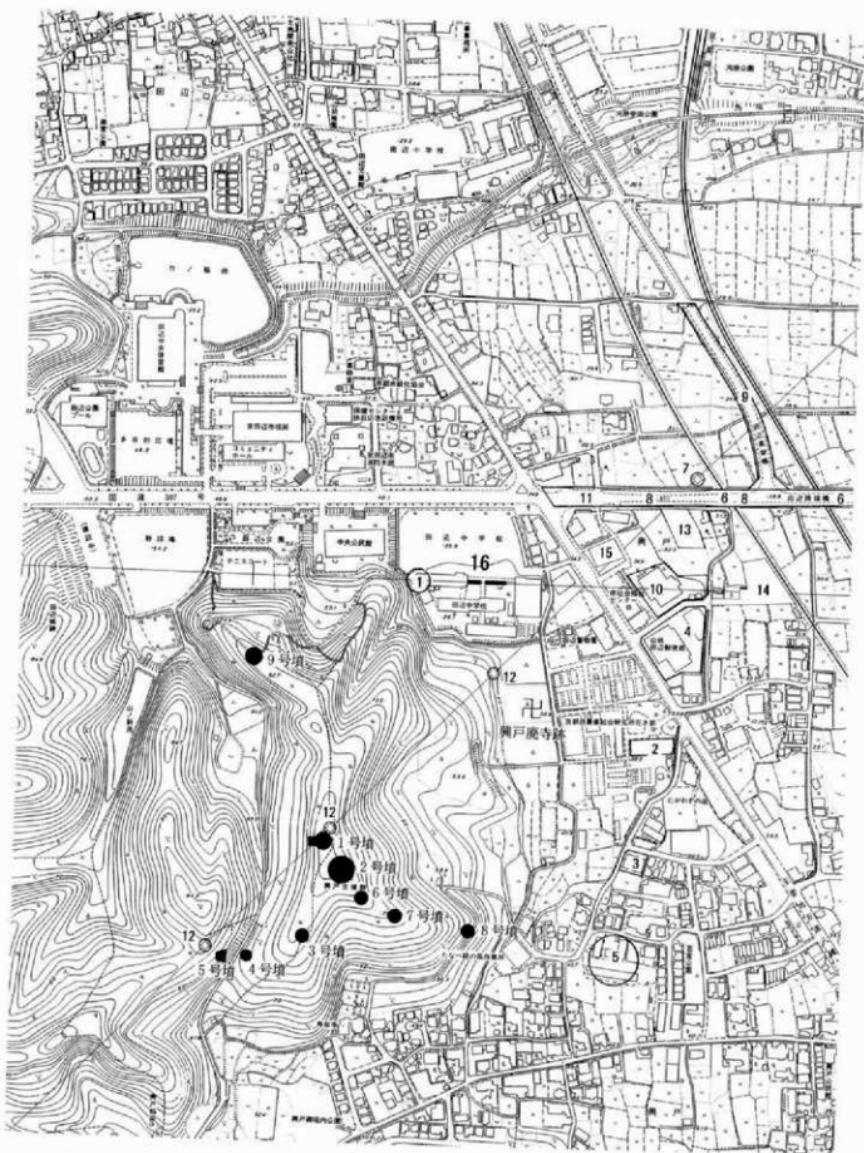
中世になると遺構数が減り、耕作溝が確認されている程度である。しかし、12次調査では鎌倉時代（13世紀代）の遺物が多く出土しており、古代山陽道を挟んで東側に耕作地、西側の丘陵部に居住域があると想定されている。

今回の調査地の旧地形は、居住域と考えられる丘陵地からやや下がった、ゆるやかな傾斜地と
考えられる。



| | | | |
|--------------|------------|-----------------|----------|
| 1 舞戸遺跡 | 13 宮津古墳 | 25 田辺遺跡 | 37 トヅカ古墳 |
| 2 南山城跡 | 14 宮ノ口古墳群 | 26 奥戸古墳群・舞戸丘陵遺跡 | 38 横穴古墳 |
| 3 口駒ヶ谷古墳 | 15 畦蒲谷古墳 | 27 奥戸宮ノ前室跡 | 39 横穴古墳 |
| 4 口駒ヶ谷遺跡 | 16 奥山田遺跡 | 28 奥戸宮ノ前道路 | 40 古屋敷遺跡 |
| 5 上谷浦遺跡 | 17 普賢寺跡 | 29 南山遺跡 | 41 田中東遺跡 |
| 6 山崎古墳群・山崎遺跡 | 18 大御堂裏山古墳 | 30 大切遺跡 | 42 田中西遺跡 |
| 7 西羅遺跡 | 19 下古墳群 | 31 南垣内遺跡 | 43 東角田遺跡 |
| 8 三木山廬寺跡 | 20 まむし谷墓跡 | 32 宮ノ後遺跡 | 44 二又遺跡 |
| 9 佐牙町内遺跡 | 21 新宗谷廬跡 | 33 飯岡遺跡 | 45 三山木遺跡 |
| 10 江津遺跡 | 22 新宗谷墓跡 | 34 飯岡車塚古墳 | 46 直田遺跡 |
| 11 屋敷田遺跡 | 23 田辺天神山遺跡 | 35 ゴロゴロ山古墳 | 47 宮ノ下遺跡 |
| 12 宮ノ口遺跡 | 24 田辺城跡 | 36 萩原山古墳 | 48 桑町遺跡 |

第2図 主要遺跡図 (S=1:25,000)



第3図 周辺地形図

数字は興戸遺跡調査次數

3. 調査経過

調査は田辺中学校の増築に伴うもので、中学校敷地中央にある渡り廊下に沿った南側を調査した。調査は、既存の建物の影響から東西の2箇所にわかつて実施した。なお、調査地は学校内であり、通常の授業が行われていたために重機の使用は土日に限定しなければならなかった。また、調査期間中に卒業式が行われるとのことと、学校行事にも十分配慮して調査を行った。

東側の調査区は3m×22mで、調査の過程で西側5m部分を2m拡幅して調査を行った。既存の校舎建設時に1.5mの厚さで造成していたため、掘削深度が深く、安全勾配をつけて調査を行った。西側の調査区は3m×7mで、東側と同様に掘削深度が深いため、勾配をつけて調査を行った。調査終了後には現況復旧を行い、入念な埋め戻しと地盤改良を行った。

調査は平成23年3月5日から調査地のうち東側調査区をフェンスで囲い、翌6日から重機にて表土掘削を開始した。3月10日に包含層掘削と遺構掘削を終え、全体撮影を行った。翌日からは遺構面より下層の堆積土の掘削を行い、遺物・遺構の有無を確認した。3月12日から東側調査区の埋め戻しを開始し、翌13日に埋め戻しを終了した。

西側の調査区は翌週の3月19日から調査を開始した。調査地はアスファルト舗装してあったため、アスファルトを切断してから重機による表土の掘削を開始した。翌20日には包含層掘削と遺構掘削を終え、全体写真の撮影を行った。埋め戻しと現状復旧作業は当日に行い、3月20日には完全撤収し、現場作業を終了した。

調査の記録は、平面実測は光波測距儀を使用し、遺構や調査区壁面の実測は手実測を行った。また、遺物の取り上げと遺構の位置を管理するために、調査区東側から任意で5mごとにグリッドを設定し、1から7の数字で管理した。記録写真は、35mmカメラと中判カメラを使用した。



第4図 東側調査区調査前風景（東から）



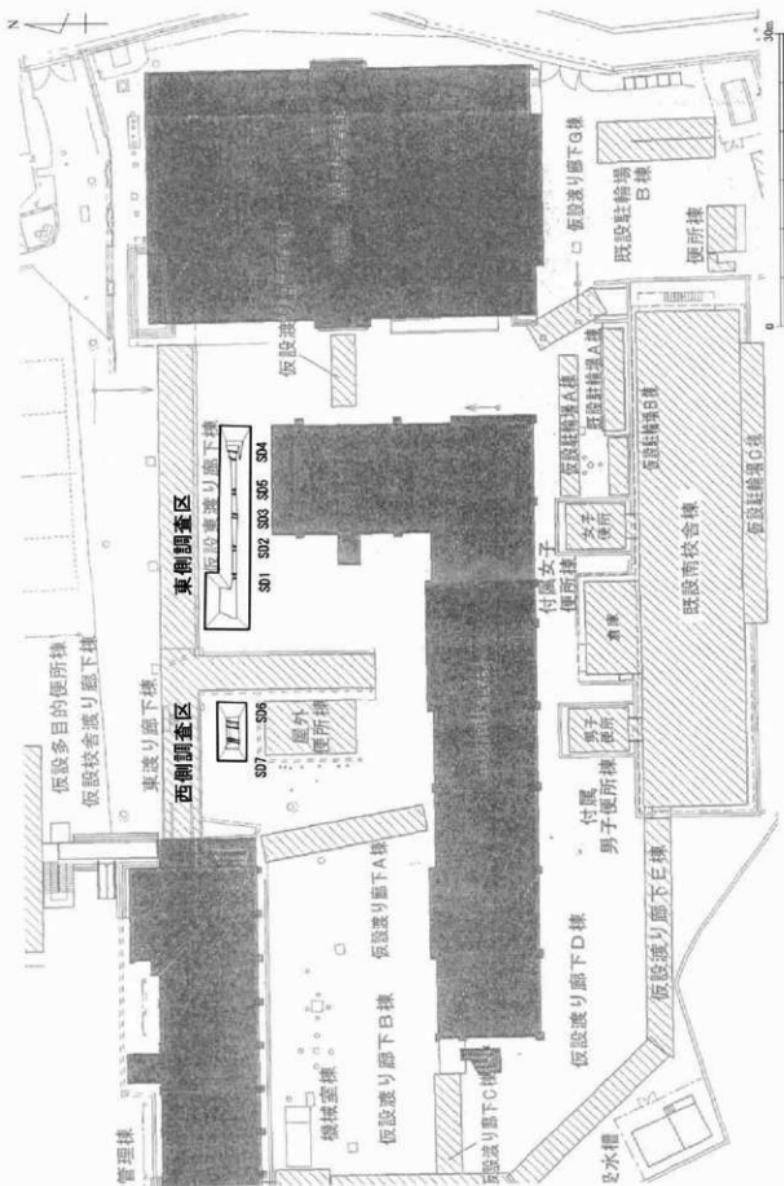
第5図 東側調査区調査風景（南西から）



第6図 東側調査区埋戻し作業風景（北西から）



第7図 西側調査区調査風景（東から）



第8図 調査区位置図

4. 調査の成果

(1) 基本層序

今回の調査の基本層序はⅠ層からⅦ層を数える（第10図）。東側の調査区と西側の調査区の堆積は同じであった。人工的な造成でないⅡ層以下を掘り下げるに、周囲から水がしみ出してきて、途端に調査区内は水没した。発掘調査は雨量の少ない3月に行つたにも関わらず、水量は多い。調査区南西の丘陵からの伏流水が北側の谷地形に向かって絶えず流れているものと考えられる。

Ⅰ層からⅢ層までが表土として取り扱える堆積である。Ⅳ層が中世の包含層で土質の違いから二層に細分できるが、ともに中世の包含層である。Ⅴ層で土のしまりが強くなり、上面で溝遺構を検出した。Ⅵ層土にも遺物が含まれる包含層であったが、細片で時期の特定ができなかった。Ⅶ層土からも縄紋土器と考えられる土器片が1点出土した。包含層と考えられるが、遺物は土器1点のみで堆積した時代が明確ではない。

Ⅰ層 現在の学校を建設した際に造成した盛り土や地表面のアスファルトを含む表土である。特に1～2グリッドにかけては新校舎の建設に伴う再造成があったため、非常にしまりの強い盛り土である。

Ⅱ層 旧表土で旧耕作土・床土などの田んぼに関係する埋土である。学校建設前は谷地形を利用した棚田がかつては存在していたことが知られており、調査区内を東西にほぼ水平に堆積していることから、田んぼ1面は谷に直交する方向に調査区の長さ以上の長さがあったようである。

Ⅲ層 青灰色粘質土で、自然堆積の間層と考えられる。

Ⅳ層 灰色砂質土で、古代から中世の遺物が出土する包含層である。層厚は30cmを測り、二層に細分でき、上層は粘性が強い。

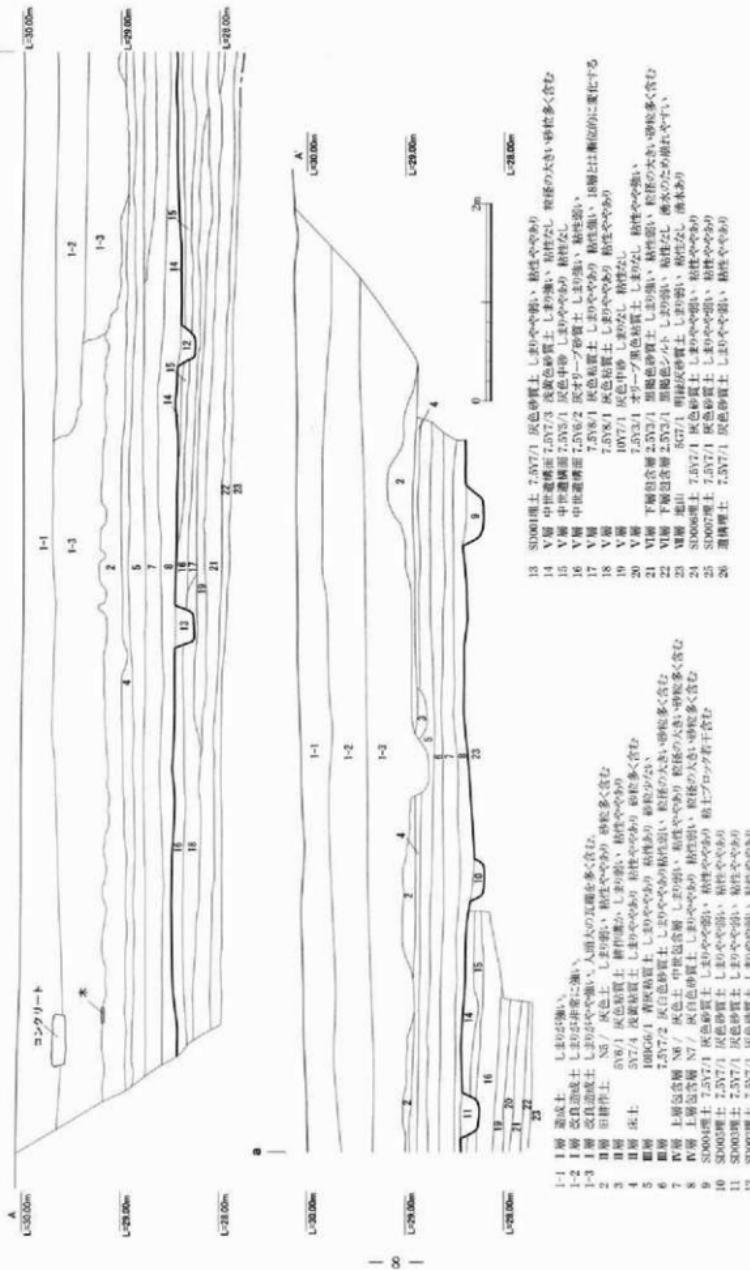
Ⅴ層 灰オリーブ～灰色砂質土でしまりが強い。Ⅴ層上面で溝などの中世の遺構を検出できた。標高はおよそ34.6mであるやかに北東側に傾斜していると考えられる。

Ⅵ層 黒褐色砂質土～黒褐色シルト質土で縄紋土器が出土する包含層である。層厚は20～30cmを測り、下位にいくにつれてシルト質が強くなっていく。

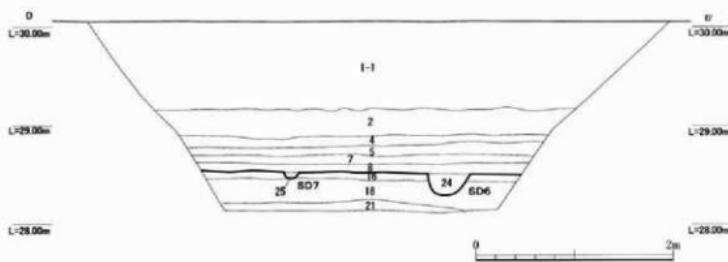
Ⅶ層 明緑灰色細砂で地山と考えられる。しまりはなく、湧水が激しい。Ⅶ層を約1m断削って観察すると、細砂とシルト質土の互層が1m以上厚く堆積していた。



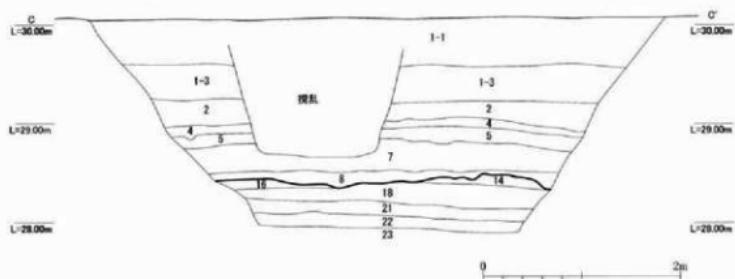
第9図 東側調査区北壁（2グリッド）



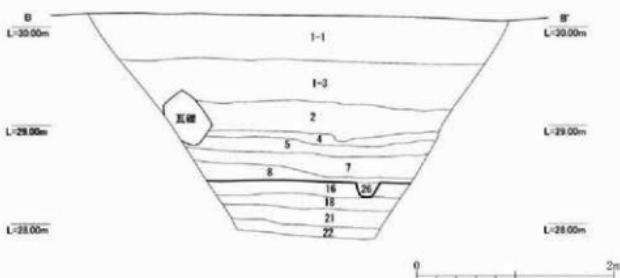
第10回 調査区北壁断面図(東側調査区)



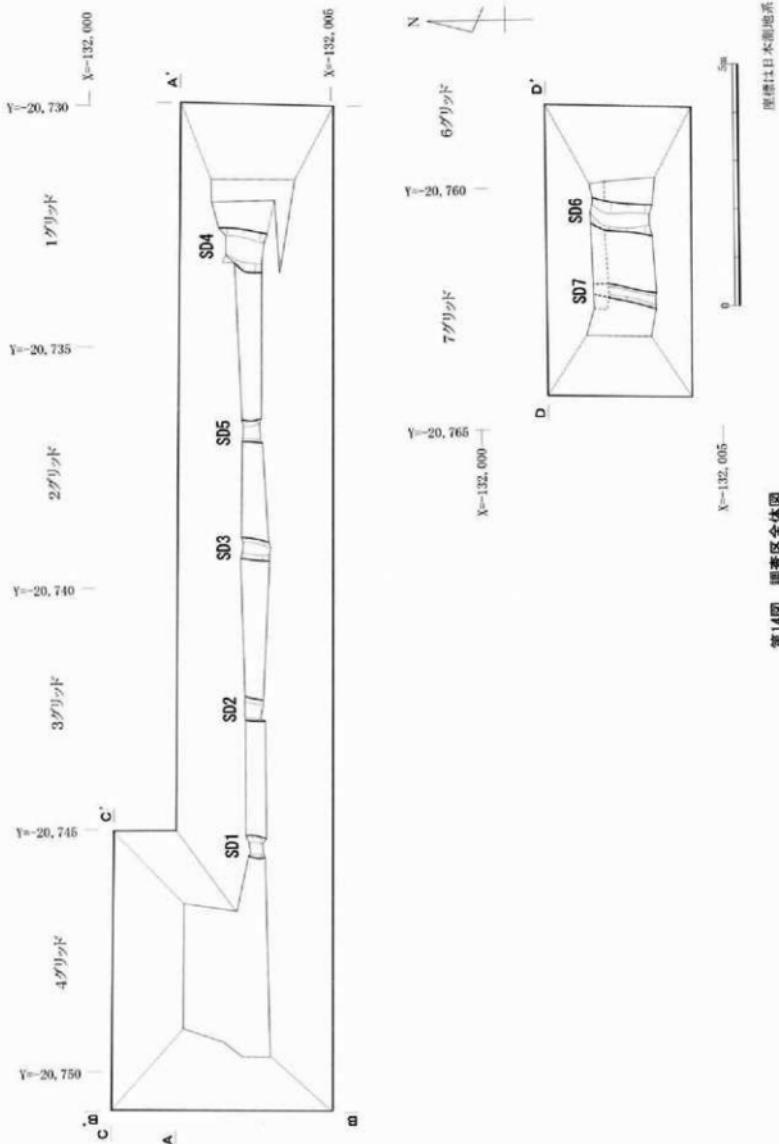
第11図 調査区北壁断面図（西側調査区）



第12図 調査区北壁断面図（東側拡張調査区）



第13図 調査区西壁断面図（東側拡張調査区）



第14図 調査区全体図

(2) 遺構

今回の調査では、トレンチ状調査区の短辺方向に並行する溝7条を検出した。北に向かって流れる溝が約3m間隔で連続して5条検出でき、溝の規模も類似していた。遺構は、地表（標高30.1m）から約1.6m下のV層（灰オリーブ砂質土）上面で検出（標高28.4～28.5m）した。V層上面は、南西から北東方向にゆるやかに傾斜する旧地形をあらわしていると考えられる。

VI層は繩紋土器を含む包含層であり、調査区内のVI層土を掘削したが、地山と考えられる明緑灰色細砂上面では遺構は確認できなかった。

また、4グリッドで2m×6mの抜張区を設けてVI層土の掘削をしたなかで、ピットと考えられる遺構を2基、地形の落ち込みと考えられる不明遺構1基を壁面で確認した。他の遺構と同じ検出面での遺構であり、ピットは径0.25mで深さ0.16mを測る。

SD 1 (第14・15図)

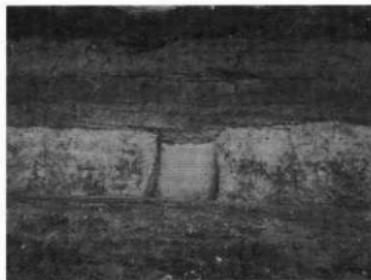
3グリッドで検出した。幅0.41m、深さ0.20m、検出長0.43mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

埋土中から瓦器塊が出土した。埋土から出土した遺物の年代から、12世紀代には埋没したと考えられる。

SD 2 (第14・16図)

3グリッドで検出した。幅0.49m、深さ0.18m、検出長0.41mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

埋土中から瓦器塊や青磁塊が出土した。埋土から出土した遺物の年代から、13世紀代には埋没したと考えられる。



第15図 SD 1 (南から)



第16図 SD 2 (南から)

SD 3 (第14・17図)

2グリッドで検出した。幅0.44m、深さ0.20m、検出長0.60mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

埋土中から土師器片が出土したが、図示できなかった。

SD 4 (第14図)

1グリッドで検出した。幅0.62m、深さ0.25m、検出長0.42mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

埋土中から土師器皿と土師器鍋が出土した。埋土から出土した遺物の年代から、12世紀半ばに

は埋没したと考えられる。



第17図 SD 3（南から）



第18図 SD 5（南から）

SD 5 (第14・18図)

2グリッドで検出した。幅0.45m、深さ0.16m、検出長0.42mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

埋土中から遺物は出土しなかった。

SD 6 (第14・19図)

7グリッドで検出した。幅0.62m、深さ0.22m、検出長1.30mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

埋土中から土師器片が出土したが、図示できなかった。

SD 7 (第14・20図)

7グリッドで検出した。幅0.24m、深さ0.08m、検出長1.30mを測る。埋土は粘性のある灰色砂質土で、遺構を覆う包含層と比較すると漸位的に変化しているため、自然堆積と考えられる。

SD 1からSD 6までと比較すると幅や深さの規模が小さく、方向もやや東側に傾く。

埋土中から遺物は出土しなかった。



第19図 SD 6（南から）



第20図 SD 7（南から）



第21図 東側調査区遠景（北西から）



第22図 東側調査区近景（北西から）



第23図 東側調査区全景（東から）



第24図 西側調査区全景（西から）

(3) 遺物

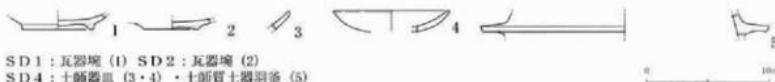
今回の調査で出土した遺物は、縄紋土器、須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁である。

中世の包含層(IV層)から出土したものがほとんどで、遺構埋土から出土した遺物は少ない。下層包含層(VI層)からは、縄紋土器が1点出土した。

S D 1 (第25図1) 1は瓦器壺である。底径5.8cmを測る底部は、断面三角形である。磨滅している。底部の形状から、年代は12世紀代と考えられる。

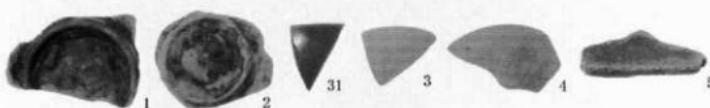
S D 2 (第25図2・31) 2は瓦器壺である。底径4.2cmを測る底部は、扁平な断面三角形である。磨滅している。31は青磁壺である。外面は錦織弁である。釉調は淡い緑青色で龍泉窯系である。2・31の年代は13世紀代と考えられる。

S D 4 (第25図3～5) 3・4は土師器皿である。3は口径不詳である。口縁端部を横ナデで仕上げている。色調は浅黄橙色で胎土は精良である。4は口径9.5cm、器高1.7cmで、口縁端部を横ナデで仕上げ、底部は不調整である。色調は浅黄橙色で、胎土は精良である。これらの年代は、12世紀半ばと考えられる。5は土師質の羽釜の鰐部分で、鰐の外径は23.4cmを測る。鰐の長さは約2cmで端部は平坦に仕上げる。山城II形式⁽¹⁾で、年代は12世紀半ばと考えられる。



SD 1 : 瓦器壺 (1) SD 2 : 瓦器壺 (2)
SD 4 : 土師器皿 (3・4) ・ 土師質土器羽釜 (5)

第25図 遺物実測図 1



第26図 遺構出土遺物

包含層出土遺物 (第27図6～29、第27図30)

土師器皿 (第27図6～9) 口径は8.2cm～12.8cm、器高は0.9cm～1.3cmを測る。ほぼ平坦な底部で口縁部が短く立ち上がる。口縁部と内面は丁寧にナデ調整されているが、底部外面は不調整である。年代は13世紀代半ばと考えられる。

土師質土器 (第27図10～15・第28図32・33) 10～12は鍋である。10は口径25.2cmを測る。口縁は短く屈曲し、口縁端部は平坦である。外面に煤が付着している。11は口縁端部をつまみ出すように成形している。12は口縁が内傾し、端部を折り返して肥厚させている。10は口縁が短く、14世紀後半と考えられる。11・12は13世紀代と考えられる。13～15は羽釜である。13は大和型の羽釜で、口縁が厚く内面がわずかに突出する。大和I形式⁽¹⁾で、13世紀半ばと考えられる。14・15はやや内傾する口縁で端部は平坦で、鰐の端部も平坦になる。14・15は山城II形式で、年代は13世紀代と考えられる。

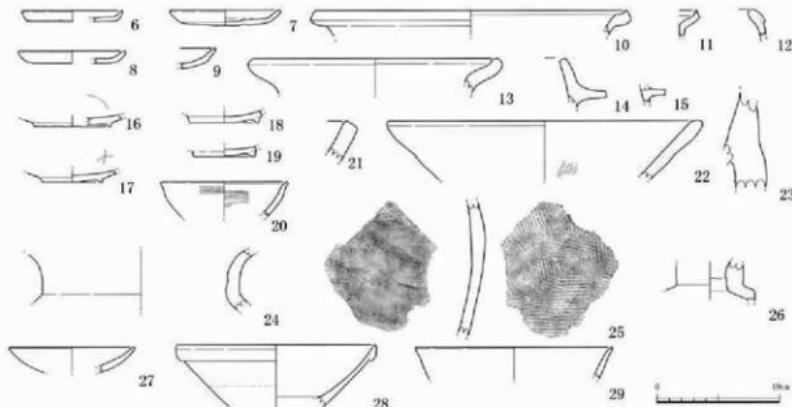
瓦器 (第27図16～20) 16～19は底部である。底径は5.0cm～6.2cmを測る。断面三角形の高台で、底部が床面にほぼ接続する。16と17の見込みには圓線状の磨きが施されている。全体的に磨滅していて、18・19は特に磨滅が著しい。20は口縁部内面端部に沈線がめぐる。外面は口縁部がゆる

やかに外反する部位に丁寧な磨きが施され、内面全体に磨きが施されている。16~20は大和型瓦器塊で、年代は12世紀後半と考えられる。

瓦質土器（第27図21~23）21は火鉢と考えられる。口縁は外傾し、端部は平坦になる。内外面全体にいぶしが残る。22はすり鉢である。口径25.6cmに復元でき、大きく外傾する口縁部で、端部は平坦になる。内面には粗いハケ調整が施される。描目は確認できない。23は三足鍋の脚部である。全体にいぶしが残る。32・33は三足羽釜の脚部と考えられる。ただ、32は断面形が扁平のため三足羽釜の脚部としてはやや異質であり、異なる器種となるかもしれない。21~23の年代は14世紀と考えられる。

焼締陶器（第27図24）24は常滑の壺と考えられる。頸部がやや直立し口縁が外反している。体部外面には緑色の灰釉が見られる。12世紀後半と考えられる。

須恵器（第27図25・26）25は東播の甕と考えられる。外面に平行叩きが施され、内面は當て具痕をナデ消している。26は平瓶か。内面は平行にナデられており、円筒状の注口は器の中心からずれて取り付けられていると考えられる。器壁が1.5cmと厚いが、平瓶のような作りをしている。25・26とも時期は特定できないが、25は少なくとも中世の範疇である。



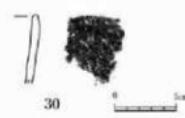
遺物包含層：土師器皿（6~9）・土師質土器羽釜（11~13）・土師質土器締（10・14・15）・瓦器塊（16~20）
瓦質土器（21~23）・焼締陶器（24）・須恵器（25・26）・白磁（27・28）・青磁（29）

第27図 遺物実測図2

白磁（第27図27・28）27は皿である。口径10.0cmを測り、推定器高は2.0cmである。28は壺である。口径は16.0cmに復元でき、口縁端部は玉縁状である。年代は12世紀代と考えられる。

青磁（第27図29）29は青磁壺である。口径16.0cmに復元できる。口縁はわずかに外反して細く取まる。浅黄色の釉薬で、同安窯であると考えられる。

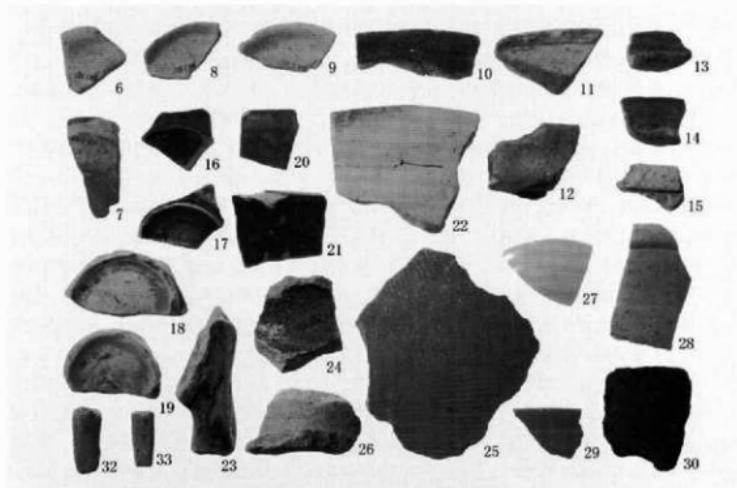
繩紋土器（第27図30）30は繩紋土器である。内外面とも無紋である。調整は外面に磨き調整を



遺物包含層：繩紋土器（30）

第28図 遺物実測図3

施しているが、不明瞭である。内面は磨滅している。器壁は0.5cmを測る。時期は不明である。



第29図 包含層出土遺物

- (1) 形式名は奥井2006の呼称に従った。その他の土器については中世土器研究会1995を参考にした。
・奥井智子 2006 「畿内における土製煮沸具の様相」『土製煮沸具の諸様相』第25回中世土器研究会日本中世土器研究会資料
・中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

5. まとめ

今回の発掘調査で確認した遺構は、12世紀代の耕作に関係したと考えられる溝遺構のみであった。ただし、これらの溝は、N 7°～8° E 方向に揃っており、溝の間隔も約3mと規格性が見られる。

これまでの興戸遺跡の発掘調査では、奈良時代に成立したと考えられる山陽道の方向を基軸にした建物配置が確認されており、N33° W 方向を示している。平安時代以降になると N24° W 方向の建物が出現し、奈良時代からの建物配置基準が変化する。つづく鎌倉時代の主要な遺構は確認されていないが、山陽道とは無関係な配置となっているであろう。

今回の発掘調査で検出した溝は、平安時代後期から鎌倉時代と考えられ、山陽道と異なった方向を示している。今回の調査地の南側丘陵地の調査（12次調査）⁽¹⁾では、平安時代後期から鎌倉時代の遺物が大量に出土しており、今回検出した溝遺構は、南側の丘陵地から続く集落範囲の一部と考えられる。調査地の北側は、旧地形としては谷地形であるため、この調査区は平安時代後期から鎌倉時代の集落の北端付近と考えられる。南側の丘陵地では平安期の木棺墓の存在が推定されており、有力者が存在していた可能性を示唆している。

出土した遺物は、12世紀半ばから13世紀代のものが大半で、中には14世紀代のものも含まれていた。これらの遺物の様相は、大和型の瓦器塊や大和型の羽釜などから典型的な南山城地域の特徴を示すものであった⁽²⁾。ただ、中世以前の包含層から出土した縄紋土器が1点出土しており、縄紋時代の集落も近隣に想定することができる。過去の調査でも縄紋時代の遺物が散見されている。

(1) 京田辺市教育委員会『興戸遺跡第12次・興戸古墳群発掘調査概報』1995

(2) 森島康雄氏にご教示いただいた。

報告書抄録

| ふりがな | こうどいせきだいじゅうろくじはくつちようさほうこくしょ | | | | | | | |
|--------------|------------------------------|--------------|---------------------|------------------------|--------------------|--|------------------|-----------------------|
| 書名 | 興戸遺跡第16次発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 完次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京田辺市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第39集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 鹿野一太郎・持田透 | | | | | | | |
| 編集機関 | 京田辺市教育委員会 | 〒610-0393 | 京都府京田辺市田辺80番地 | | | | | |
| | 株式会社イビソク | 〒612-8425 | 京都府京都市伏見区竹田田中殿長86番地 | | | | | |
| 発行年月日 | 2011年3月31日 | | | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | コード | | 北緯 °' " | 東経 °' " | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 興戸遺跡 第16次 | 京都府 京田辺市 興戸北鉢立 21番地 | 26342 | | 34度 48分 47秒 | 135度 46分 13秒 | 2011年 3月5日 ～ 3月20日 | 94m ² | 田辺中学校新 管理棟建設工 事 |
| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 興戸遺跡 | 集落 | 平安時代 鎌倉時代 | 溝 | 土師器・白磁・青磁・ 瓦器・中世須恵器 | | 平安時代から鎌倉 時代の耕作溝と考 えられる溝群を検 出した。また、下 層包含層から縄紋 土器が出土した。 | | |

平成23年3月30日 印刷

平成23年3月31日 発行

興戸遺跡第16次発掘調査報告書

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第39集)

発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

編集 株式会社イビソク

〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地

電話 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社